

実践と理論の融合をめざして

「教育実践研究」成果発表会 院での学びを18名が発表

2月23日、教職大学院生による研究成果の発表会が開かれた。発表数は全18本。実践と理論の融合をめざした多様な考察や方策等がプレゼンテーションされ、質疑応答がこれに続いた。

綿巻徹副学部長はまとめとして、今すぐにも活用できる内容が多かったことを評価しつつ、自分が明らかにした成果を重点的かつ詳細に発表することや、質疑の先鋭化が図られれば更によい発表会になると指摘した。この日、院生から多くの質問も出され活性化した発表会となったことも、教職大学院の資産として評価された。

教職大学院は、研究期間によって1年プログラム、2年プログラム、3年プログラムに分かれる。構成は、県内の現職教職員が在職のまま1年間ないし2年間学ぶケース、教育学部から進学したケース、さらに他大学・他学部から進学し教育を学ぶケースからなる。今年度発表者は現場教職員10名、教育学部からの進学者4名、他学部からの進学者4名。

彼らは、子ども理解・特別支援教育実践コース、学校運営・授業実践開発コース、理科・ICT教育実践コース、国際理解・英語教育実践コースの4つのコースにそれぞれ分かれ研鑽を積んできた。発表された研究が生きて働き、学校現場でよりよい教育を推進するものとなることを祈りたい。

入学を希望する方は下記「募集」コーナーを参照。意欲ある方々の入学を期待する。

成果発表から

学級集団の満足度を高める学級経営のあり方を求めて
～不登校・不適応生徒の予防と問題解決の方策を探る～

子ども理解・特別支援教育実践コース (佐世保市立崎岡中学校) 箱崎史朗

■KEYWORD 予防、学級経営、気になる生徒、教師の視点

本研究では、満足度を高める学級経営を行うために、教師の生徒観察から得られた評価について、Q-Uの結果との比較検証から有効性を明らかにするとともに、学校不適応となる学級の課題を早期発見し、不登校予防に向けた方策について探った。結果として、一般生徒と比較して、学級生活満足度、学校生活意欲において有意差が見られた。また、その気になり方から「欠席群」「行動群」「学習群」「対人関係群」に分類し、一般生徒と比較すると差の表れ方に共通点があることと各群特有の傾向があったことが分かった。つまり教師の視点に立った気になる生徒について、丁寧な観察および支援をしていくことで、気になる生徒の学級生活満足度を高めることができる可能性が示唆された。満足度を高める学級経営の展開のためには、新学期のQ-Uの結果をもとに、学級全体への的確な一次的援助を行い、同時に気になる生徒への二次的援助として丁寧な観察・支援を行っていくことが大切である。



読みに困難のある児童への読みの指導の実践研究

子ども理解・特別支援教育実践コース (佐世保市立春日小学校) 岩永久子

■KEYWORD 読みの指導、AD/HD、流暢性、単語高速再認、興味・関心

小学校3年用国語教科書の単元の多くは非分ち書きの漢字が混じり文で、このような文章が流暢に読めるには、単語や文節を高速で再認するスキルの熟達と漢字の習得が不可欠だと考えられる。本研究は、分ち書き、文の折り返しに注目して視認性を変化させた3種類の教材を作成し、通常学級に在籍する読み困難のAD/HD小学生3年男児2名に音読個別指導を行った。約3か月間に約20分間の音読指導を5回実施した結果、両対象児の読みスキルが上達した。毎指導後の感想文には、読みスキルの上達と学習への興味・関心の高まりを示す記述が綴られていた。担任への全指導期間後の聞き取りでは、読みの上達や学習に取組む態度の変化が語られていた。終わりに、この音読個別指導が読みスキルの上達に寄与した要因を単語高速再認スキル、個別指導の必要性という視点から考察するとともに、対象児の自信や意欲にどのような変化をもたらしたかを考察した。

ねりあいによる子どもの学びの高まりに関する研究
～主体化と協働学習を組み込んだ3step centration learningモデルの提案～

学校運営・授業実践開発コース 野口亮介

■KEYWORD 協働学習、小学校国語科国語教材、発達一学習一活動、「座」村野四郎

私は、IRE構造の授業(いわゆる一問一答型の授業)から、子どもが主体となる授業への転換を目指している。そのために、原中心一脱中心化一再中心化という3段階での学習主体の性格の変化を構想し、子どもの学びの高まりをねらった授業モデルを作成し実践を行った。ここで子どもが高まるとは、差異を媒介した協働学習からそれぞれの児童生徒が自らの意見と考えを持つことで、この協働による学習過程をねりあいとする。本研究では、次の課題が得られた。1つ目は、子どもが気づいていないことを気づかせたり、ゆさぶりで考えをより鮮明にしたりするなどの教師の発展的介入の必要性だ。これによるねりあいによって子どもの考えが高まることのできる。2つ目は、つけたい力の焦点化である。各時間で、どのような力を子どもにつけたいかを明確にすることで、より子ども主体の授業ができる。ここで得られた成果を、4月からの実践で生かしていきたい。



教員研修・参加体験型研修の企画と運営について
学校における参加体験型の学びの創出

学校運営・授業実践開発コース (県立西陵高等学校) 藤修

■KEYWORD 教員研修、ワークショップ、教員養成、学校評価、体験学習法、アントレプレナー教育

本研究は、学校を学びの総体としてとらえ、効果的な研修の企画運営を行うために多面的・実践的に取り組んだ研究の実践的な報告である。報告の内容は、①参加体験型研修の企画と運営に関する分析 ②学校評価に関わる実践 ③教員養成プログラム開発に関わる実践 ④起業家教育プログラム開発に関わる実践 ⑤環境教育プログラム開発に関わる実践 ⑥教員研修プログラム開発に関する実践であり、参加体験型研修の可能性について考察を行った。これらの実践は、参加体験型研修における「創発性」(個が集まることで集団としてアイデアや能力が発揮されること)と、汎用性の高さを有効活用し、さまざまな場面(学校評価・環境教育・起業家教育など)で協働の学びを実践し、プログラムの検証と開発を行ったものである。さらに、教員養成段階において参加体験型研修を体験し、段階的に実践することが大切な視点であることについても述べている。

科学的思考活動を活発にする授業の工夫
～高等学校化学において～

理科・ICT教育実践コース (県立長崎南高等学校) 近藤潤

■KEYWORD 科学的思考活動、高校化学、興味・関心、実験

科学的思考活動を中心に現在の高校化学授業を考え、次の4つを考慮すべきとした。①興味・関心を引き出す、②生徒の考えを表現させる、③科学的思考活動をともなう観察・実験の実施、④考える時間の確保。また、教師が授業時間の確保等に苦慮している実態から、現在の授業の枠組みを大きく変えず、科学的思考活動を導入する方法を考え実践した。行ったのは、パワーポイントによる教材の作成と授業への実験の導入である。実験の導入は、単元の最初に実験を導入するものと、実際の授業について考えながら問題演習を行うもの等である。授業後のアンケートや科学的思考力をはかる問題などから良好な結果が得られ一定の成果が認められた。そして、これらの活動の中で感じたのは、高校生はきっかけがあれば科学的思考活動を始めるということであった。さらに実践を重ねる高校化学授業の質的改善を目指し科学的思考活動の充実を図っていきたい。



英語授業における語彙指導の実践について
～多文化化した語彙情報の提示による語彙定着を目指して～

国際理解・英語教育実践コース 平山陽子

■KEYWORD EFL、意図的語彙学習、語形成、語彙結果性

EFL(外国語としての英語)学習者に語彙指導を行う際、自動的な語彙学習に期待する付随的語彙学習のみに固執することは妥当ではなく、意図的語彙学習の併用が望ましい。しかしながら、意図的語彙学習活動の効果を検証する研究は十分であるとは言えず、教育実践の場で語彙指導が積極的に行われていないようである。このような現状を踏まえ、本実践研究は、多様な語彙情報を与える方略が学習者の語彙学習に与える影響について考察した。対照実験の結果から、多文化化した語彙情報を提示することは、テキスト上に登場した語彙についてのテストではその効果は顕著ではないが、テキストに登場しない語彙についてのテストでは、有意に高い効果を示していることが示唆され、この効果は時間の経過とともに減少した。また、短期的に見て、語形成に関する情報は有効に活用された一方、語彙の結束性に関する情報は干渉を引き起こす可能性が認められた。

発表者とテーマ

- 【3年プログラム】
- 1 東 貴宏
理科学習における話し合い活動の活性化
- 2 平山 陽子
英語授業における語彙指導の実践について
～多文化化した語彙情報の提示による語彙定着を目指して～
- 【2年プログラム】
- 3 鈴木亜沙美
ユニバーサルデザインを取り入れた国語科授業づくり
～特別支援教育と教科教育の融合～
- 4 中島 和彦
小学校における遊び介在教育に関する実践研究
- 5 内野 大介
小学校におけるマルチ能力を活かしたキャリア教育に関する研究
- 6 野口 亮介
ねりあいによる子どもの学びの高まりに関する研究
～主体化と協働学習を組み込んだ 3 step centration learningモデルの提案～
- 7 谷本 麻希
生徒の積極的言語活動を引き出すための教室英語の工夫について
～現状分析を見据えた課題と展望～
- 8 藤本健太郎
英語教育における音声指導の在り方について
～ディクテーションを用いたリスニング指導の実践～
- 9 江口真理子
特別支援学校に求められるセンターの機能とコンサルテーションのあり方
～地域の小学校への継続した支援を通して～
- 10 藤山 悦子
対人関係の苦手な児童に対する支援のあり方
～自立活動「人間関係の形成」の内容を取り入れた実践～
- 11 中島佐和子
児童の心理的安定を図るためのアロマテラピーによる支援の検討
- 12 近藤 潤
科学的思考活動を活発にする授業の工夫
～高等学校化学において～
- 【1年プログラム】
- 13 岩水 久子
読みに困難のある児童への読みの指導の実践研究
- 14 箱崎 史朗
学級集団の満足度を高める学級経営のあり方を求めて
～不登校・不適応生徒の予防と問題解決の方策を探る～
- 15 松本 幸子
自己理解を深めることによる学級内での不安軽減の効果について
～構成的グループエンカウンタの活用を通して～
- 16 沙庭 美穂
生徒の自己実現を支えるキャリア教育の在り方についての研究
～高等学校を中心に～
- 17 藤 修
教員研修・参加体験型研修の企画と運営について
- 18 根津正二郎
科学的思考活動を活発にする理科の授業を求めて



教職大学院研究室風景

とても貴重だった教職大学院生活

理科・ICT教育実践コース1年プログラム (浪佐見中学校) 根津正二

CST(コア・カリエーション)を目指して大学院に入学した。本教職大学院は各コースの特色ある授業、教育相談など教職の授業、学校教育実践実習の3本柱で成り立っており、月・火は実習、水～金は授業が基本パターンである。実習校には2～3か月お世話になり授業実践等に取り組む。これに講義レポートやプレゼンが加わり大変な生活を送る。しかし、様々な年齢層の人と交流を深めながら勉学に励むことは何事にも代えがたいものがあった。院の授業では、日頃できなかった野外観察や天体観測もでき、生まれて初めて木星の帯やオリオン大星雲を見て感動した。大学院で学んだ教職員としての資質・友情・感動をもって、この春から教壇に戻ることを楽しみにしている自分がここにいる。

募集

大学院への入学を希望される皆様へ

本大学院では、大学学部卒業生をはじめ、現職の先生方が在職のかたちのままで学んでいらっしゃいます。当ニュースレターに記載されているように、学ぶ意欲に満ちた方々の積極的な入学をお待ちします。

専攻

1 教職実践専攻(教職大学院)
……募集人員20人
専門職学位が取得できます。この専攻には次の4つのコースがあります。子ども理解・特別支援教育実践コース、学校運営・授業実践開発コース、理科・ICT教育実践コース、国際理解・英語教育実践コース。

2 教科実践専攻
……募集人員18人
修士が取得できます。この専攻には次の4つのコースがあります。言語文化と社会の教育コース(国語専修免許プログラム)、社会専修免許プログラム、数理的教育コース(数学専修免許プログラム)、生活と身体教育コース(技術専修免許プログラム)、家庭専修免許プログラム、保健体育専修免許プログラム、芸術と文化活動の教育コース(音楽専修免許プログラム、美術専修免許プログラム)。

試験期日

平成24年度の一般選抜は10月初旬の予定

出願期間

1年で修了する1年プログラムの希望者は8月初旬、2年あるいは3年で修了する2年・3年プログラムの希望者は9月初旬の予定

詳しくは下記に問い合わせてください。